

# 雲の手通信

2005年12月

第19号

発行人； 茶木 登茂一

このお便りは私が担当している太極拳教室のみなさんに毎月お届けしております。

## 今月のトピックス

### 自前のTシャツを作った亀戸教室

江東区の「亀戸スポーツセンター教室」では、会員の皆さんが自主的に相談しご覧のような個性的なTシャツを作りました。背中には会員O氏の夫人の書による「雲手」が、前には同じく会員のJ氏がパソコンからデザインした赤地に白抜きの印字体の「亀」が、それぞれプリントされています。



### 瑞江鶴の会は初めての舞台演武

江戸川区の「瑞江鶴の会」は去る11月13日(日)に開催された地域のお祭り「第29回・東部地域祭り」にはじめて参加しました。



当日は好天に恵まれてお祭りは大勢の人で賑わいました。

出場された皆さんはこれに備えて一ヶ月ほど前から練習を重ねていた、八段錦と太極拳

を披露しました。大勢の観客から好意のこもった拍手をいただき、出演した皆さんは来年もぜひ参加したいと言っております。



## 癌の「転移」とは何？

「癌は早期に手術で切除すれば転移しない」などとよく聞きます。「転移」ということは、

①「体のある部分に出来ている癌病巣から癌細胞が血液やリンパ液を介して他の部分に移ってそこでまた新しい病巣として増殖を始めること」と通常言われています。

ところが、一方こういう言葉もよく見聞きします。いわく――

②「だれでも癌細胞は毎日 3000～6000 個ぐらい（もっと少ないという説もあれば、もっと多いという説もあるようですが）出来る。ただし普通は自然治癒力が正常に働いているので、（白血球の力で殺してしまうので）増殖しない。」

③「癌細胞が増殖を繰り返して診断可能な1センチぐらい（細胞の数で約10億個！）の大きさに成長するには、（一部の癌をのぞいては）5年とか7年という長い時間が掛かる。

――いずれも権威のある方がたが発言されたり、書かれたりしていることですから、おそらくはそれぞれに正しい説なのでしょう。

とすると①説と②③説とは明らかに矛盾しているように思えます。つまり、転移しようとしまいと、他の部分で着々と増殖を続けている別の癌巣があるかも知れないということになります。ちなみに手術後に「転移」が発見されるのは1～2年がもっとも多いそうですから、まさにコレは「転移」というよりも、③説に従えば、成長過程にあった別の癌と考えるほうが自然ですね。私の友人の一人も喉頭癌に始まり、次いで食道癌、それを切ったら、次は肺癌になり、幾たびもの手術も虚しく死亡してしまいましたが、まさにこのケースだったのでしょね。

癌治療についてユニークな見解を発信し続けておられる近藤誠医師（慶応義塾大学医学部放射線科講師）は、「癌は一種の老化現象。放置すれば徐々に体力が衰え老衰死に至る。昔の老衰死も多くは今で言う癌によるものだったが癌検診などないので分からなかっただけ。」と明解です。「手術をしてもしなくても余命は変わらないのだから、（とくに老人は）癌検診を受けて自覚症状の無い癌を発見されたり、手術を受けたりする必要は無い。」とも述べておられます。

昔は癌治療といえば、手術、抗癌剤投与、放射線照射が三大療法とされてきましたが、最近はこちらの方法にもいろいろな疑問が呈せられるようになり、他方新しい治療法も出てきています。患者のリンパ球を取り出して、体外で増殖させて（力を強めて）ふたたび体内に戻すというような画期的な方式も徐々に広がりつつあるようです。

いずれにしても、癌はばい菌のように外から入ってくるものではなく、もっぱら自分自身の内部で何らかの理由で生じ、成長し、或いは時として自然に萎縮したり消滅したりするものです。末期癌でお医者さんから見離された患者さんでも奇跡のように蘇える方も多々おられるのですが、例外なく何らかのきっかけで（たとえば、自分の生き様や人生観、死生観を切り替えるとか）自分の生命力、自然治癒力を信じて自分自身の分身である癌細胞と向き合うことで、いつのまにか癌細胞が退縮し始め、やがて消滅したということです。人間の生命力の不思議さをつくづくと感じますが、じつは自然治癒力の根源である「リンパ球」の数が増え、かつ活性化した結果と見ると不思議でも何でも無いことなのですね。

【「用語解説」「旅をうたい拳を詠む」「遊印遊語」は紙面の都合で今回は休載しました】